

彩の歳時記

平成二十七年 五月

初夏即事 王安石
石梁茅屋有彎碕
流水濺濺度兩陂
晴日暖風生麥氣
綠陰幽草勝花時
石梁茅屋彎碕有
流水濺濺として兩陂を度る
晴日暖風麥氣を生じ
綠陰幽草花時に勝る

石の橋げた、茅ぶき小屋、くねくね曲がった岸の上、流れる水はさらさらと、土手の間を抜けていく透明な陽射し、穏やかな風は麦穂の香りを運ぶ、新緑の木陰にかさけき草、春の花盛りに勝る風情よ

五月は陰暦では夏、新緑が輝き、薫風が爽やかな季節。漢詩『初夏即事』は初夏の景物を取り揃え、水の音から麦の香りまで、視覚・聴覚・嗅覚の感覚全てを揺り動かすのは「目には青葉山ホトトギス初鰹」に通じます。女流作家の嚆矢「樋口一葉」の本名は「夏子」、太陰暦から太陽暦に変わった明治五年(1872年)生まれ。それから100年の歳月が流れ、女性の立場も変化、首相・大統領・学長など多くの場での活躍が目を引きまします。温故知新、新緑のように新しい陽光を吸収して輝きたいものです。



五月の催事

文京つつじ祭り(根津神社) 四月十一日から五月六日 約2,000坪の境内の苑に約50種3,000株のつつじ

藤まつり(亀戸天神) 四月十三日〜五月六日 藤の下、巫女舞や猿まわし、茶会等

神田祭(神田明神) 九日・十日 日本三大祭の一つ、本祭の今年是他の日に催事が。

三社祭(浅草神社) 十五〜十九日 初日の十五日には、「びんざさら舞」と呼ばれる、

神楽やお囃子が練り歩く「大行列」が行われる。

五月の暦 五月、早月、皐月(皐は気が澄み渡るの意) 五月晴、五月闇、五月雨など

一日 **メーデー** 本来**五月祭**を意味し、夏の訪れを祝う祭がヨーロッパの各地で催されてきたが、近代に入り、現在の労働者の日「メーデー」へと転化。

二日 **八十八夜** 雑節。立春から八十八日目。「夏も近づく八十八夜 野にも山にも若葉が茂る...茶摘み」

三日 憲法記念日(祝日) 1947年(昭和22年)に日本国憲法が施行。改憲を望む声もあるが、平和憲法を高く評価する人も多く、改憲派、護憲派のそれぞれが集会などを開き、主張をアピールする。

四日 **みどりの日(国民の休日)** 自然に親しむとともにその恩恵に感謝し豊かな心をはぐくむ。

四日 **修司忌** 生誕八十年を迎える劇作家、演出家、映画監督、詩人、歌人、俳人、競馬

評論家などの顔を持つ伝説のマルチアーティスト・寺山修司【1935〜1983】の忌日。

「さよならだけが人生ならばまた来る春はなんだろう」など名言を遺している。

「言葉の錬金術師」の異名を持ち『寺山修司名言集』は今も人気が高い。

「この世でいちばん遠い場所は 自分自身のところである」「書を捨てて街に出よう」



寺山修司名言集 寺山修司の言葉のあふり

五日 子供の日(祝日) **端午の節句** 端(はじめ)午(うま)という意味で五月初初の午の日に由来。

強い香気で厄を祓う菖蒲(尚武)の節句が男の子の節句に。

六日 **立夏**【二十四節気】 本州各地では田植や田起こし、田に水の張られる頃。

十日 母の日【第二日曜日】 母の日の来るよ不孝を量(はか)るため 福永耕二【1938〜1980】

二十一日 **小満**【二十四節気】 麦などの穂がつく頃(少し満足)するの意。万物盈満・草木枝葉繁る。



五月の歌 五月の歌 Sehnsucht nach dem Frühling 春への憧れ

モーツァルトが晩年、子供向けに作曲して作品。メロディーは中田章の歌曲「早春賦」に似ていると言われる。日本ではピアノソロ用にアレンジされたものが初級練習曲として使われている。訳詞の青柳善吾

【1884〜1957】 福島県喜多方市出身で唱歌教育から音楽教育へと転換した音楽教育の先駆者と言われる。唱歌一辺倒であった音楽教育の時代に、音楽鑑賞の指導、作曲の指導、器楽の指導を自ら行った。

楽しや五月 草木は萌え
小川の岸に すみれにおう
やさしき花を 見つっ行けば
心もかろし そぞろあるき
うれしや五月 光は映え
若葉の森に 小鳥うたう
そよ風わたる 木かげ行けば
心もすずし そぞろあるき